

研究主題 「国を愛する心を育てる道徳の時間の指導の工夫

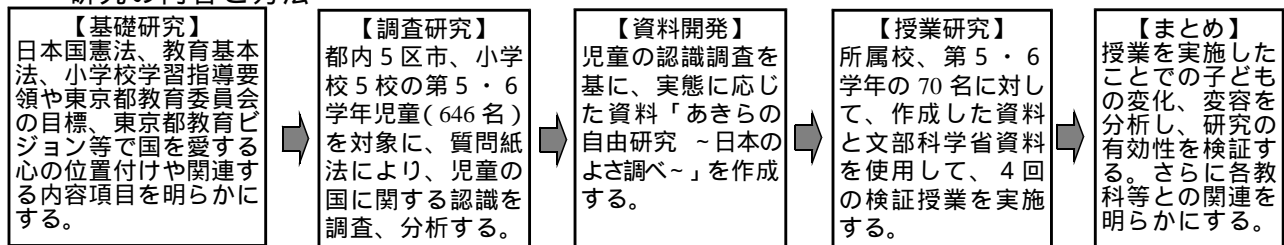
～ 児童の国に関する認識をてがかりとして ～

東京都教職員研修センター 研修部 経営研修課
練馬区立開進第三小学校 教諭 渡邊 万里子

研究のねらい

次代を担う児童・生徒には国際社会に生きる日本人として、世界の人々から信頼、尊敬されるよう、日本人としての誇りと自覚をはぐくむことが大切である。平成 15 年中央教育審議会答申では、「日本の伝統・文化を基盤として国際社会を生きる教養ある日本人の育成」、平成 16 年東京都教育ビジョンでは「国際社会に生きる日本人としてのアイデンティティをはぐくむ教育」の必要性を挙げている。この指導を道徳の時間において考えると、児童の直接経験が少なく、多様な価値内容を含み他の内容項目と異なるため、指導の難しさが挙げられる。そこで、本研究では日本の文化などをはじめとして、児童が国に関してもっている認識をてがかりに、道徳の時間において国を愛する心を育てる指導の工夫を追究することをねらいとした。

研究の内容と方法



1 基礎研究

(1) 「国を愛する心」について

「国を愛する心」とは、自国をつくっている人々、自然、文化、伝統、歴史等の理解を深め、尊重し、継承・発展させ、自己や社会の理想を求めて主体的に生きようとする思いととらえた。

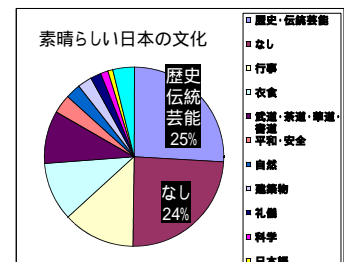
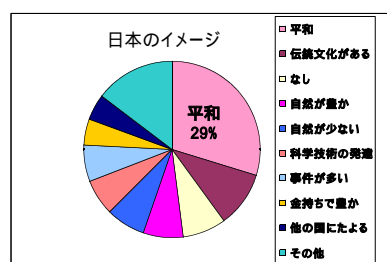
(2) 児童の「国」に関する認識

認識とは対象を感覚し知覚してさらに記憶・思考に至る作用や働きを表す。単に事物に対する客観的な知識だけではなく、事物をどのようにとらえ自分なりに感じているかという感性的な作用をもっている。児童の国に関する認識を考える場合、人々、自然、文化、伝統、歴史等に関する知識・理解の側面と、国に関してどのようにとらえ感じているかという感性的な側面から考えていく必要がある。この考えを基に児童の認識調査を行った。

2 調査研究

(1) 認識調査

児童の国に関する認識を把握するため、児童が日本をどのようにとらえ、外国との関係をどのようにとらえているか調査をした結果、次のことが明らかになった。



国に関する知識・理解は社会科等の教科学習や新聞、テレビ等のニュースから培われる。外国のニュースで知っていることは、テロや戦争に関することが多い。
 日本のイメージは「平和」という児童が多いが、全体に多様で、イメージが「ない」という児童もいる。
 日本の文化は伝統的なものを素晴らしいと感じているが、全体の約四分の一の児童は、素晴らしいと思う文化は、「ない」と答えている。
 「国を愛する」こととは「平和」「自然を大切にする」「伝統文化を守る」「人々と協力する」という回答が多い。
 これからの日本に期待することは「世界平和のために頑張っていく」「自然が豊かな美しい国になってほしい」「日本は、地球の自然を守るように頑張っていく」「外国と仲よく」「人々のためにできることをしていく」である。

以上の調査結果から、児童は生活の中で日本の文化を意識する機会が少なく、国に関して自分のこととしてとらえているには不十分であるということが分かった。そして、児童の国に関する認識を基に、国を愛する心を育てるための視点を大きく次の3点に分類した。

- ・人とのかかわり・・・ 家族、友達、地域の人、国民、人類等
- ・自然とのかかわり・・・ 自分を取り巻く生命・自然、環境、風土等
- ・文化とのかかわり・・・ 伝統、歴史、生活、慣習等

本研究ではよりよく生きる力の自覚に結び付けるために、認識における知識・理解の側面の指導を充実させ、感性的な側面の実態に応じた指導を行うことが重要であると考えた。それは道徳的価値の自覚を深めることにもつながるととらえた。

(2) 「国を愛する心」に関連する内容項目（高学年）

児童と社会等とのかかわりについて図1のようにとらえた。そのかかわりを道徳の内容項目と照らし合わせてみると、表1のように「4の視点」が関連すると考えた。さらに認識調査結果より、児童は自然を重視していることが分かった。

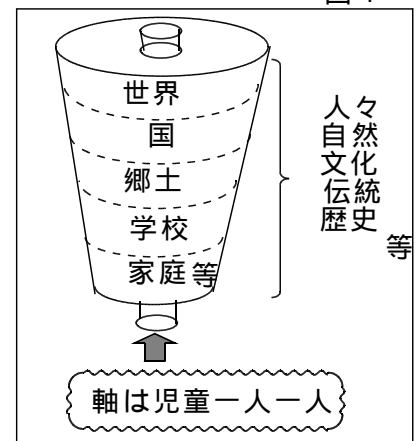
そこで3-(1)も関連する内容項目として考慮した。

表1 「国を愛する心」に関連する内容項目（高学年）

家族や家庭を愛する 4-(5)	父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。
学校を愛する 4-(6)	先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。
郷土を愛する 4-(7)	郷土や我が国の文化と伝統を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。
国を愛する 4-(8)	外国の人々や文化を大切にすることをもち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。

自然を愛する3-(1) 自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする。

図1



3 児童の実態に応じた身近な資料の開発

先行研究や認識調査から、児童の国に関する認識は低く、国について考える機会が身近にないことが分かった。そこで、認識を基に分類した「人・自然・文化とのかかわり」の視点を入れた身近な題材を資料とし、児童の国に関する知識・理解と興味・関心を高めることがねらいに迫る効果的な方法と考え「あきらの自由研究～日本のよさ調べ～」を作成した。本資料は、主人公あきらが5人に日本のよさについてインタビューし、日本のよさを人、自然、文化とのかかわりの側面から考えるというオムニバス形式の資料である。日常生活の話から地理的な広がりや歴史的な知識に関連する話にし、日本のよさを多角的に考えられるようにした。児童があきらに自分を当てはめて日本のよさを考えることができるよう工夫した。

4 授業実践に当たっての工夫

(1) 資料の特性、児童の興味・関心に応じた弾力的な指導

6年生第1回目の検証授業では、自作資料「あきらの自由研究」で、5つの話題から児童が興味・関心をもち、意見交換をしたいと思った話を選択し、話題別のグループで話し合う活動を第1時に取り入れた。また、児童はねらいに迫るための直接経験が少ないので、基礎となる知識が必要である。そこで第1時の後、家庭学習で調べたり聞いたりする活動を組み合わせ、知識を広げたり深めたりし、第2時の授業に臨むようにした。第2時はさらにねらいとする価値への自覚を深められるよう、児童一人一人の思いを深める展開にした。

(2) 視点をしばった資料の選択

5・6年生ともに第1回目の授業は「人・自然・文化」全体にかかわる資料「あきらの自由研究」、第2回は国を愛する心の自覚を一層深めるよう、第1回目の児童の反応から「人・自然・文化とのかかわり」の視点をしばった資料で授業実践をした。

(3) 心情を掘り起こす切り返し

心情を適切に表現できない児童や発言が概念的な児童の気持ちを具体的な言葉で表現できるよう、切り返しの工夫として教育相談的手法を参考にした。(「教育相談の心理ハンドブック」北王子書房 参照)

うながし	「それで」「ちょっと続けて」「というと」「もう少し説明して」「何を」
確認	「～ということかな。」「～ということでもいいかな。」 「要するに～ということかな。」
明確化	「どうしてそう思ったの。」「何がもとでそう思ったの。」 「何からそう思ったの。」「どんなこと」「例えば」「どんなイメージなのかな。」 「さっきの発言とちょっと変わったみたいだけど、どうかな。」

(4) 評価方法

認識調査を基に児童の変化、変容をみとる方法として、自分の生活を振り返るときと同じ発問を導入時にもする、意図的な指名で発言を促す、グループの話し合いでは自分の気持ちを書いた付箋紙を貼らせる等の工夫を行った。

研究の結果と考察

1 検証授業の結果

第5、6学年での検証授業では表2のような主な児童の反応が見られた。

表2 「人・自然・文化」の視点にかかわる主な児童の反応と考察

学年	資料 実施日	「人・自然・文化」の視点にかかわる主な児童の反応（複数回答可）	考察
5年 38名	【第1回】 あきらの自由研究 10月13日 (欠席1名)	・今まで気付かなかった日本のよさについて知り、日本にも誇れる文化がたくさんあることに驚いた。 19名(51.4%) ・日本の自然を壊すのは悲しい。 5名(13.5%) ・日本のよさについてもっと考えたり、調べたりしてみたい。 4名 ・日本に生まれてよかった。 2名	日常生活ではほとんど考えたことのない日本のよさについて考える機会となった児童が半数以上いた。
	【第2回】 世界の文化遺産 12月8日	・先人の努力に対して賞賛や感謝の気持ちをもった。 33名(86.8%) ・これからも文化遺産を守っていききたい。 18名(47.4%) ・実際に見て、調べてみたい。 14名(36.8%) ・外国の文化についても知りたい。 2名	先人の偉大さに感心し、守り続けていきたいという気持ちをもった児童が多かった。
6年 32名	【第1回】 あきらの自由研究 11月10日 11月11日 (欠席1名)	・今まで考えたことがなかった。 15名(48.4%) ・思っていた以上に日本のよさがたくさんあり、日本に生まれてよかった。 9名(29.0%) ・外国人が日本に興味を示したり、日本の文化を素晴らしいと思っていたりするので、それを大切に、もっと日本をよい国にしたい。 12名(38.7%)	児童が考えたことのない日本のよさについて考える機会となった。2時間扱いにし、間に調べ学習を入れたことで思いを深められた。
	【第2回】 日本の心 12月15日	「日本の心とはどんな心か」の発問 導入時 考えたこともないから分からない。 10名(31.2%) 無回答 20名(62.5%) 伝統行事 1名、富士山やお米 1名 展開後段 自然を尊敬する心、自然と共存する心。 27名(84.4%) ・日本の心はいつも自然を敬う心をもつことだ。 ・自然に生かされているという心を忘れてはいけない。 ・残すべきものを後世に伝えていく。	児童は、日本人としての自然観について深く考え、西洋と比べて独特であること(自然に対する畏敬の念)に気付き、そのよさを大切にしようと考えた。

日本に対する認識の低かった児童は2回の授業で表3のような変化、変容が見られた。

表3 日本に対する認識の低かった児童の授業後の変化、変容（A～Eは対象児童）

年	認識調査	第1回目授業後	第2回目授業後
5	日本の素晴らしい文化はない。	A 日本のよさを改めて知った。四季があるのはよいと思った。	A 知らなかった日本の伝統文化がすごいと思った。大事に守りたいし、見てみたい。
6		B 自分が生まれた国なのによさがわからなかった。意見を聞き、なるほどと思った。日本に生まれてよかった。	B 最初は日本の心について何も思いつかなかった。日本の心とはお母さんのような自然。自然がなかったら自分はいなかったと思う。自然と触れ合っていきたい。
6		C 今まで当たり前だと思っていたことが日本のよさだというのはよかった。外国人が日本に興味があるのも嬉しい。	C 自然の立場に立つことが大事。自然に生かされているという心を忘れずにいたい。
5	精密技術が誇れるが平和ではない。	D 四季を楽しめたり、伝統の技があるが、日本人は自分のことしか考えないから、本当によい国とは言えない。	D 日本の伝統文化は全部の人の大切な宝だから壊さないように大事にしたい。
6	アメリカに守ってもらえない弱い国。	E 日本の文化を世界の人々に伝えていきたい。人が作り出したものだけでなく山や海があるのもよいと思った。	E 日本の心とは昔からある寺、神社、伝統行事だと思っていた。この学習で日本の心とは自然というかけがえのないものもあると思った。

前述のように「人・自然・文化とのかかわり」の3つの視点に基づき、国について考えることで、児童は当たり前だと思っていたことにも日本のよさがあることに気付いた。さらに日本の文化の基盤である日本人の自然観を感じたり、文化を築いてきた先人に尊敬や感謝の気持ちをもったりし、今までの自分を振り返り、これから自分がそれとどうかかわっていかうか考えることができた。これは、本研究のねらいである国を愛する心の道徳的価値について理解を深め、自分とのかかわりで道徳的価値をとらえ、道徳的価値を自分なりに発展させていこうとする思いをもつことで、道徳的価値の自覚を深めることができたと考えられる。

2 各教科等との関連

認識における知識・理解を広げたり深めたりするためには、各教科の学習や総合的な学習の時間、特別活動、その他の教育活動において関連する事項を学習する機会を計画的に設定する必要がある。そこで、関連する事項を整理した。これらの学習と道徳の時間とを関連付けて指導することで、一層ねらいに対し効果を上げることができると考える。

研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

「国を愛する心」は児童にとって非日常的で直接経験としてとらえにくい主題である。そのため、まず身近な題材を資料にすることが児童の興味・関心を高め、思いを深めることにつながるようになった。さらに国についてじっくり考えることができるよう、児童の認識における知識・理解を広げたり深めたりしておくことが、感性的な側面である「国を愛する心」を育てることに結びつくことが明らかになった。また、児童の考えを引き出し深めるために、心情を掘り起こす切り返しをすることが有効であることが分かった。

2 今後の課題

この実践を踏まえて、異文化に対しても、独自の伝統や人々の誇りがあることを理解し、尊重するとともに国際親善に努める心を育てる内容項目4-(8)へ指導を発展させていきたい。また各教科等との関連において「国を愛する心」を育てるために効果的な指導を行えるよう、全体計画の中での位置付けを明らかにしていきたい。